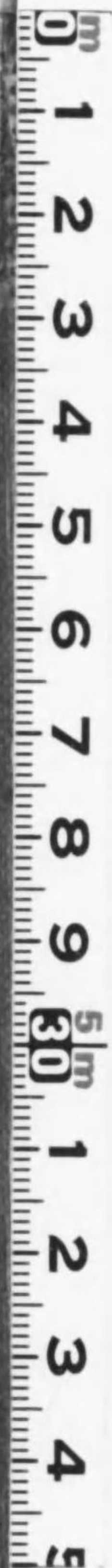


花道全書

智

特 260

275



始



特260
275

一	一	一	一	一	一
祈願花の事	年忌花の事	佛前花の事	歡佛花の事	追善花の事	神前花の事

目次

花道全書

智之卷



- 一 婚禮花の事
- 一 移涉花の事
- 一 立春花の事
- 一 上巳花の事
- 一 端午花の事
- 一 七夕花の事
- 一 重陽花の事
- 一 八朔花の事
- 一 書院花の事

- 一 蓮生方の事
- 一 櫻万年青生方の事
- 一 星配生方の事
- 一 野中清水生方の事
- 一 段躑躅生方の事
- 一 萩玉川生方の事
- 一 山吹玉川生方の事
- 一 卯玉川生方の事
- 一 通天楓生方の事

- 一 高尾楓生方の事
- 一 寶船生方の事
- 一 八橋生方の事
- 一 俱利伽羅龍生方の事
- 一 四季花生方の事
- 一 瀧の手生方の事
- 一 繪合生方の事
- 一 玉鬘生方の事
- 一 胡蝶生方の事

- 一 松風生方の事
- 一 蓬生生方の事
- 一 潞標生方の事
- 一 明石生方の事
- 一 夕顔生方の事
- 一 梅枝生方の事
- 一 若菜上生方の事
- 一 若菜下生方の事
- 一 柏木生方の事

- 一 御法生方の事
- 一 幻生方の事
- 一 匂宮生方の事
- 一 竹川生方の事
- 一 橋姫生方の事
- 一 椎本生方の事
- 一 總角生方の事
- 一 早蕨生方の事
- 一 宿木生方の事

- 一 浮舟生方の事
- 一 東屋生方の事
- 一 手習生方の事
- 一 夢の浮橋生方の事
- 一 横笛生方の事
- 一 箒木生方の事
- 一 花器定法の事 (四)

花道全書

智之卷

一 神前花の事

榊又は陽花を如何様の義にも生くべしこれを和光同塵
と云ふ。

一 追善花の事

白花を生く生方素直に閑體なるがよろし。

一 歡佛花の事

卯月八日の花なり天上天下唯我獨尊と生くべし。

一 佛前花の事

見ごこなる色花を立花のやうに生くべし。

一 年忌花の事

三回忌迄は赤き花を生けず又針ある草木名の悲しき草木は生くべからず。

一 祈願花の事

時節の祝儀花を用ひ花形素直に繁榮に生くべし。

一 婚禮花の事

離れ易きの故を以て葉組物を生けず松竹梅藪柑子其他時節の祝儀花用ゆべし。
嫁取には白、婿取には赤花を生くべし。

一 移涉花の事

凡て時節の祝儀花宜し。雖赤花又はヒの字の附くものを遠慮すべし。これヒは火に通ふ所以なり。杉水草など尤も宜し。

一 立春花の事

松竹梅、若松藪柑子、椿其の外祝儀花見合せ生くべし。

一 上巳花の事

柳、桃、椿其の他祝儀花見合せ生くべし。

一 端午花の事

蓬、菖蒲其の他時節の祝儀花宜し。

一 七夕花の事

竹、萩、仙翁、桔梗等時節の祝儀花宜し。

一 重陽花の事

菊其の他時節の祝儀花宜し。

一八朔花の事

雁來紅其の他黄か白の時節花を生くべし。

一書院花の事

書院の花は富貴に生くるを第一とす花器も清く花枝も清く水も亦清くして花と花器との調和に重を措くべし。花枝澤山なるを富と云ひ水際より花枝の備へ綺麗なる

を貴とす。

書院の花は床飾なれば風流に過ぎて花枝の曲屈多きは本意にあらず枝葉の間に自然と風情あるこそ手練なれば床飾には時節の花を用ふべしと雖祝儀も場合によりて夫々嫌ふべき草木あり只樂しみに生くるものは万花万草何にても差支なし又花會の時は花枝も花器も好次第にて異風なるも苦からず花形如何に變ることも要は花枝の個性に背かざることなり世に心の花を生くることは心を直にして邪疑二念を去り花枝も個性に背かざるやう

少しも無理なく生てこそ誠の心より出たる花の形なるべし個性を無視し花形を亂したる花は死花にして祝儀とならず饗應にも成らざるべし。

一蓮生方の事

梵語曼陀羅華本名芙蓉なり汚泥の中に生して其の濁に染まず清淨なるが故に花中の君子とも云へり古歌に

蓮葉の濁に染まぬ心もて

何かは露を玉とあさむく

とあり。

砂鉢又は廣口の類に生くべし蓮には三世の傳と云ふあり葉に付て云へば過去は破葉現在は盛りの葉未來は卷葉なり又花について云へば答は未來にして満開は現在蜂巢は過去なり生方序を未來に破を現在に急を過去に花と葉を取合して生け根元に浮葉を遣ふべし。

一櫻万年青生方の事

幹を遣ひて名櫻三種の内一種を常體に生け根元に万年

青を副ふ万年青は第一段四枚第二段四枚第三段四枚を
 長短を附して組み實かこひ適當に用ひ遣り違葉杓子葉
 浮根は遣ふに及ばず前より見るときは附副にして斜に
 見るときは一分の間隙あるやう生くること緊要なり。

一星配生方の事

五重切に白菊一式を生く初重五輪二重七輪三重九輪四
 重五輪を五重目は葉澤山に遣ひて一輪生け葉かくれに
 苔一輪を遣ふべし總計二十八輪にしてこれ二十八宿を

象りたるものなり苔一輪葉かくれに遣ふは調の數を嫌
 ふによる二十八宿とは

- | | | | | | | | |
|----|---------------------|---------------------|----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 東方 | 角 <small>シホ</small> | 亢 <small>アノ</small> | 氏 <small>トモ</small> | 房 <small>ソヒ</small> | 心 <small>ナカ</small> | 尾 <small>オシ</small> | 箕 <small>イ</small> |
| 西方 | 奎 <small>トカ</small> | 婁 <small>ウラ</small> | 胃 <small>ヘ</small> | 昴 <small>スバ</small> | 畢 <small>アノ</small> | 觜 <small>トロ</small> | 參 <small>カサ</small> |
| 南方 | 井 <small>チ</small> | 鬼 <small>ホメ</small> | 柳 <small>コソリ</small> | 星 <small>ホト</small> | 張 <small>ナリ</small> | 翼 <small>タス</small> | 軫 <small>チツ</small> |
| 北方 | 斗 <small>ヒツ</small> | 牛 <small>イナ</small> | 女 <small>メ</small> | 虛 <small>トイ</small> | 危 <small>ヤメ</small> | 室 <small>ハツ</small> | 壁 <small>ナマ</small> |

連れる星のくらひも見ゆるかな

秋の雲井の菊のさかつき

一野中清水生方の事

馬盥又は廣口に松齒朶草花六種水草一種計九種を生くるなり。

松は直立體のもの一本其の根元に齒朶を副ひ其の横に水草を生け松と水草との前に十字形の間隔を置きて草花を生く間隔は古來これを清水の魚道とも云へり松の根元に清水の湧出する體なり。

古の野中の清水ぬるけれど

もこの心を知る人そ汲む

一段躑躅生方の事

五重切に伊吹、白、紅、薄紅躑躅及著莪を生く京都段山の景色を象りたるものにして嶺に立伊吹一本山腹に種々の躑躅ありこの意を以て生くべし初重は立伊吹一本と見ゆるやう二重白三重紅四重薄紅と随分澤山に遣ひ五重目著莪を生くべし。

入日さす夕紅や白玉の

色くらべなる段つゝしかな

一萩玉川生方の事

五重切に萩と白菊をを生く初重より四重迄萩澤山に遣
ひて玉川に萩の繁り垂れたるやう又五重目に白菊一二
輪を遣ひて川に月影のうつりたる體を生くべし。

またもこむ野路の玉川萩こえて

色なる波に月やさりけり

一山吹玉川生方の事

五重切に山吹一式を生く初重より四重迄山吹を華かに

川の邊りに安らかに垂れ懸りたる體に生くべし下重は
水計りを入れて川と見るべし。

駒さめてなほ水かはむ山吹の

花の露そふ井手の玉川

蛙なく井手の山吹ちりにけり

花の盛りにあはましものを

一卯玉川生方の事

五重切に初重より四重迄卯の花の盛りて白雲の如く見

ゆるを澤山に遣ひて川に垂れ懸りたる體に可成趣向面白く生け下重虎甘草を副ふべし虎甘草は葉の働き緊要なり。

玉川の里の垣根の袖すりに

雪こほれます卯の花のころ

一 通天楓生方の事

五重切に楓一式を生く通天橋より見下す體に株を遣はず葉表を見するやうに生くること緊要なり。

一 高尾楓生方の事

五重切に楓二重序に生く山麓より見上る體に株を遣ひて葉裏を見るやうに生くること緊要なり五重目著莪なり。

一 寶船生方の事

古元朝遊に生けしものなり置船に松竹梅仙蓼万蓼福壽草讓葉杯七種を生く船の外に餘り枝葉を出さず根元何

れも前より見ゆるやう注意すべし。

七種は七福神を象りたるものにして七福神とは惠比須、大黒、布袋、福祿、毘沙門、壽老、辨天なり。

一八橋生方の事

砂鉢又は廣口に杜若を雌雄兩株に分ち更に其の雄株を四株と見ゆるやう又雌株を四株に總計八株とし雌雄兩株中の一株は後に遣ひて一見七株と見せ雌雄兩株の間に交互に八の橋をかくべし。

植をきし昔の宿のかきつはた

色はかりこそ昔なりけり

から衣きつくなれにしつまあれは

はるくきぬる旅をしそおもふ

一俱利伽羅生方の事

五重切に初重を頭に五重目は破の手を流して尾と見二三四重共序破急に生けて卷付きたる體に生くべし俱利伽羅龍は佛書より出でたるものにして花器を寶劍と見

るべし。

一 四季花生方の事

五重切に春夏秋冬土用と生け又これを四季に生く其花
枝左の如し。

春	梅	杜若	春菊	伊吹	石落
夏	若松	杜若	夏菊	卯の花	石落
秋	古木松	杜若	黄菊	山茶花	石落

冬	梅全	杜若	寒菊	椿	石落
---	----	----	----	---	----

石落は五枚に限る。

一 瀧の手生方の事

五重切に初重序二重序何れにても時の見合せにて檜を
随分賑かに生け二重三重に縞著莪を副ひて水を落し瀧
と見五重目草花を生け下に廣口を置き水草を生けて瀧
壺と見るなり。

一 繪合生方の事

釣瓶を釣りて上瓶に落枝を遣ひて梅を生け赤椿を根元に副ふ落枝は椿を把る心なり又下瓶には仙蓼寒菊水仙の三種生けなり。

身こそ斯くもしめの外なれそのみかの

心のちちを忘れしもせず

しるしのうちは昔にあらぬ心地して

神代のこども今そこひしき

一 玉鬘生方の事

三重切の初重に蔓物を生け破の手を流して二重と三重との間を切るべし二重及三重目は共に水草を生くべし。

戀わたる身はそれなれと玉かつら

いかなるすちを尋ね來つらむ

一 胡蝶生方の事

掛籠に連玉常體に生け撫子の花一二輪思ひかけなき所に生け蝶と見るなり。

こてふにもさそはれなまし心ありて

八重山吹をへたてさりせは

花園の胡蝶をさへや下草に

秋まつ虫はうごく見るらむ

一松風生方の事

三重切の初重に松を風吹の體に柳を二重序に生け三重
目小菊を生くべし柳は五筋なりこれ五風の意なり。

身をかへて獨り歸へれる山里に

一蓬生生方の事

掛籠に蓬の序を半月にかざして裏葉を見るやうに生け
姫百合水際綺麗に蓬と反對の勝手に副ふべし

たつねてもわれこそはめ道もなく

深き蓬のもこのころを

一 濬標生方の事

砂鉢に芦三株に生けあいだくゝに水葵を芦の後より生
くべし水葵の根元見へずとも苦からず。

みをつし戀ふるしにこゝ迄も

めぐり逢ひける縁にはふかしな

數ならて難波のこどもかひなきに

なごみをつくし思ひ初めけむ

一 明石生方の事

廣口にいざりたる松を其の前に梅嫌を生け奥に鹽風を
一かたまりに生くべし。

獨ねは君も知りぬやつれくゝこ

思ひあかしの浦淋しさを

旅衣うらかなしさにあかしかね

草の枕にゆめも結はす

一 夕顔生方の事

手附籠の手に夕顔を巻き付けて生け上より裏葉を下げ

下より花を生け出して行き違ふやうにし赤草花を根元
副とすべし。

心あてに夫れかこを見る白露の

光そへたる花の夕顔

よりてこそ夫れかこも見めたそかれに

ほのく見つる夕顔の花

一梅枝生方の事

三重切に梅一式を生く下重に株を遣ひてスワイ二本を

生け花器の中央を登して三重序とし全體を一木一體に
見て生くべし。

鶯のねくらの枝もなひく迄

なほふき通せ夜はの笛竹

鶯の聲にやいこゝあくかれむ

心しめつゝ花のあたりに

一若菜上生方の事

掛籠に小松又は伊吹を生け草花を根元に副ふべし。

若菜さす野邊の小松を引きつれて

もこの岩根を祈る今日かな

小松原末のよはひにひかれてや

野邊の若菜も年をつむへき

一若菜下生方の事

置籠に草花七種を花籠の如く澤山に生くべし。

夕露に袖濡らせこや蝸の

鳴くをきくく起きて行くらむ

一柏木生方の事

馬盃に柏を生け芍薬を根元に副ひ斜に見るときは一分
の間隙あるやう生くべし芍薬の上に柏急の外に一本か
ざし枝を差出すべし。

ここならはならしの枝にならさなむ

葉もりの神の許ありきこ

柏木に葉守の神はまさすこも

人ならずへきやこの梢か

一 御法生方の事

薄端に伊吹を半月にかけて生け後に白菊眞に低く立て
根元に齒朶奥深く副ふべし。

惜しからぬ此の身なからも限りごと

薪つきなむここの悲しさ

絶えぬへき御法なからを頼まるゝ

世々こ結ふなかの契を

一 幻生方の事

釣舟に柳三筋を生け根元に白玉椿一輪葉三枚か五枚を
副ふべし。

大空をかよふ幻夢にたに

みえこぬ魂の行方たつねよ

一 匂宮生方の事

三重切の初▽に破の手を流して梅嫌を生け中重窓の中
に白菊眞に下重は中重と同じ勝手に蘭を生くべし。

おほつかな誰に問はまし如何にして

初も果も知らぬわか身そ

一 竹川生方の事

砂鉢向ふ側に竹を白草花を前側に前後の株分に生け其の間を川と見るなり草花の上に竹急の外一本差出すべし。

竹川の橋のつめなる花園にはれ花園に我をは放てやめさしたくへて

竹川のはし打ち出てし一ふしに

深き心のそこをしりきや

一 橋姫生方の事

廣口に杜若二株宛四株の株分に生け其懐に河骨二株と一株とを株分て副ひ巻葉にて雄株より橋をかくべし。

橋姫の心を汲みて高瀬さす

棹のしづくに袖そぬれぬる

さし歸へる宇治の川長朝夕の

半や袖をくたし果つらむ

一 椎本生方の事

馬盥に晒序を遣ひ其の後に山茶花を斜に見るときは一
分の間隙あるやうに副ひ晒の元に忍草三枚か五枚を副
ふべし。

われなくて草の庵はあれぬとも

このひともこはかれしこそ思ふ

立寄らむかけと頼みし椎ヶ本

空しきここになりけるかな

一 總角生方の事

釣舟に蔓物を生け控と急とを舟の前後に垂らし根元に
小菊を副ふべし。

總角になかき契をむすひこめ

おなしごころによりもあはなむ

ぬきもあへすもろき涙の玉の緒に

長き契をいかにむすはむ

一 早蕨生方の事

廣口に苔付葉梅を生け根元に蕨五本か七本梅を見て圖らず蕨を見出したる心得にて副ふべし。

君にきてあまたの春をつみしかは

つねを忘れぬ初蕨なり

此の春はたれかに見せむ亡き人の

形見につめる峰の早蕨

一 宿木生方の事

五重切の初重序に老松を生け二三四重共同じ松を生け五重目藪柑子なり二重目と三重目同じ破の手の上に梅又は櫻、梅全を宿すべし松は一木一體なること肝要なり。

やこり木と思ひ出すは木の下

たひねも如何に淋しからまし

あれ果つる朽木の下を宿木と

思ひ置きける程の悲しさ

一 浮舟生方の事

釣舟に山吹を控を流して鎖の間を通し梶の體に生け紫
蘭を陰方に副ふべし。

年ふとも變らぬものか橘の

小島のさきに契る心は

橘の小島は色も變らしを

この浮舟は行方知られぬ

一 東屋生方の事

瓢の内に椿を生く花を胴に据へ覆葉を遣ふべし葉數は
何枚にても宜し。

さしこむるむくらやしけき東屋の

あまりほこふる雨そとさかな

一 手習生方の事

五重切の初二三四重に草花五種を生け四重目の破の手
を流して五重目水計りなり。

身をなけし涙の川の早き瀬を

しからみかけて誰かごゝめし

一 夢浮橋生方の事

砂鉢に白蓮を株分に生け間に浮葉を浮べ蓮の根元に開
葉を遣ひ其の下より浮葉の上に向けて巻葉にて橋をか
くべし

世の中はゆめの渡ししか浮橋の

うちわたりつゝものをこそ思へ

一 横笛生方の事

尺八筒の上重に少しく風體をつけて柳七筋か九筋生け
下重に草花を筒に添へて生登すべし。

横笛の調はここに變らぬを

空しくなりし音こそつきせね

笛竹に吹よる風のことならば

すゑの世なかき音につたへなむ

一 簾木生方の事

五重切に上二重共窓の内に白菊眞に生け赤花にて三重序に四重目同じ赤花出張りたる様に生くべし下重は葱草なり。

簾木の心も知らてその原の

みちにあやなく迷ひぬるかな

數ならぬ伏屋に生ふる名のうさに

あるにもあらず消ゆる簾木

一花器定法の事 (四)

獅子口 窓口狭きが故に此の名あり長九寸六分月輪八分窓の長一寸六分釘穴普通なり。

兩窓 又置筒とも云ふ筒の中央に柱ありて左右大窓の如きより此の名あり定法なし但柱巾は竹の周圍を十二分したるものとす。

樓臺 兩窓の上に水溜のあるものを云ふ寸法定法なし。五重切 古千利休床に二重切を生け次床に三重切を生け置きしに客稱美の餘り三重切を二重切の下に持ち行きしに取り合せ殊の外面白かりしとこれより五重

切始まるごも云へり月輪釘穴普通にして釘穴は二重
目に作り節數は陽數にすべし其の他定法なし。

花手桶 定法なし恰好見計ひ陰數にすべし。

眞手桶 高四寸六分手の高二寸六分手の幅一寸四分横
木は六分四方手桶の直径八寸にして總黒溜塗割蓋附
なり。

大窓 窓の大なる故に此の名あり窓八寸節下二寸六分
にして月輪釘穴普通なり。

智之卷終

昭和八年四月一日印刷
昭和八年四月十日發行

(非賣品)

岡山市東田町八〇番地
編輯兼發行人 吉備專敬流代表者 長尾俊憲

岡山市東中山下一二三番地
印刷者 村本万龜男

岡山市東中山下一二三番地
印刷所 研精堂印刷所

岡山市内山下二〇番地

發行所 吉備專敬流本部

不許
複製

終

